

今回は、中島隆信『これも経済学だ！』ちくま新書。

中島さんは、慶応大学商学部の先生。実は、我が家の娘がその学生だったことがあり、中島先生（慶応では君）の話は時々でていました。おもしろい講義だといっていました。本書のあとがきにあるように、経済学部ならぬ商学部で経済学を教える難しさを突破しなければならない事情があってこそだということがよくわかります。

本書は、5章構成をとっています。1章と5章に経済学的思考とはなにかが簡潔にまとめられています。結論は、経済学は人間が人間らしく生きるために欲望をうまく活用する方法を見つけ出す思考のツールということにまとめられます。社会現象をモラルや法だけで判断したり、見える部分だけで判断して因果関係を逆転させたりせずに、「それはなぜなんだろう」ということをきちんとしたツールを使って考えることが大事だと著者は力説します。高校までの社会科教育のなかで決定的にかけているのが、この「なぜ」を考える教科だとも指摘しています。現場の人間としては耳が痛い指摘です。だから、社会科は暗記科目になってしまうのでしょうか。

1章では機会費用などを紹介しながら、様々な事例を通して経済的思考の応用範囲の広さを印象つけます。

2章以下は、著者がすでに刊行している単行本、『大相撲の経済学』『お寺の経済学』『障害者の経済学』の三部シリーズをもとにして、伝統文化、宗教、弱者を取り扱っています。特に、4章での弱者問題は、当事者としての体験を踏まえた弱者論でもあり、目からうろこの指摘が随所にあります。やさしい書き方ですが、内容的には深いものが提起されています。

最終章の5章では、欲望と経済学が再論されますが、そのなかで経済学では、善悪でレッテルをはらないで、人間の弱さも含めてその行動の背景や原因を探る懐の深い学問であることが強調されます。

この本は、なぜ経済を教えなければならないのかという根本で迷っている先生方、なかなか興味をしめしてくれない生徒にいかにか経済は面白いのか、役立つ勉強かを印象つけたいと思っている先生方にきっと参考になると思います。

この本で取り上げられている事例を教室で紹介して、生徒の興味をひきつけて授業の本論に入るもよし、論争的問題（身近では、シルバーシートの是非、高度な問題では障害者自立法の是非など）をとりあげてみるもよし、事例をもとに生徒に分析をさせるもよし、いろいろな利用の仕方ができる本だと思います。

私の現在の関心から言えば、この本の1章でてくる「経済学的思考」が高校までの学習のなかで自然にそだってくるようなカリキュラム（学習指導要領）を作ることができるかどうか、試されているなど感じています。